

3. 弥生時代の遺構と遺物

当該期の遺構は、弥生時代終末期の竪穴住居を3棟確認した（図17 竪穴住居1～3）。うち、竪穴住居1は建て替えが為されている。また、古墳時代後期の竪穴住居を1棟（竪穴住居4）検出した。調査区中央部東側と南側にかけて検出したピット群の一部からは、埋土中から当該期や古墳時代の土器片が出土しているが、埋土の土色や掘立柱建物等遺構との対応関係が明確でないため、本節では扱わないこととする。

（加藤）

竪穴住居1（図18～20 図版1、2-1、13-1・2）

台地のほぼ中央に位置し、調査地内においてもほぼ中央、M7・8グリッドにある。表土下のⅡ層上面で検出した。2基の竪穴住居が平面入れ子状に重複している。埋土を観察すると、内側の住居の埋土⑧層・⑩層・⑫層・⑬層が、外側の住居の埋土⑳～㉒層を切っていた。加えて、内側の住居の周壁溝が外側の住居の柱穴であるピット5を切っていた。これらのことから外側の住居の方が古く、これを竪穴住居1aとし、内側の住居を竪穴住居1bとして順に報告する。

竪穴住居1aは平面方形を呈し、長軸・短軸とも5.4m、検出面からの深さ約36cm、床面積は約21.4㎡である。住居1aの床面は住居1bの掘り方に切られ、縁辺部が遺存するのみである。遺存部分はほぼ平坦であるが、地形と同様に北半部がやや低い。床面は基盤層であるⅤ層とⅥ層の境界上にあり、Ⅵ層上面が露出する住居北辺を除く南側に貼床（⑭・⑮層）が施してあった。周壁下に1条の周壁溝を検出したが（㉑層）、住居北辺の一部は攪乱を受け全周しない。遺存する床面からピット1～5を検出した。ピット1・3～5はほぼ同規模で、掘り方の四隅に位置することから支柱穴に該当する。ピット1・3・4の埋土はいずれも2層に分けられ、㉒層は柱痕、㉓層は掘り方埋土に相当する。㉒層の幅から、柱材の径は12～15cmであったと考えられる。ピット5は柱材を抜き取ったものと考えられ、埋土㉒層中から桃核が出土した。桃核の出土状況は住居廃絶時の祭祀の可能性がある。いわゆる中央ピットの有無については不明である。



図17 弥生時代・古墳時代遺構分布

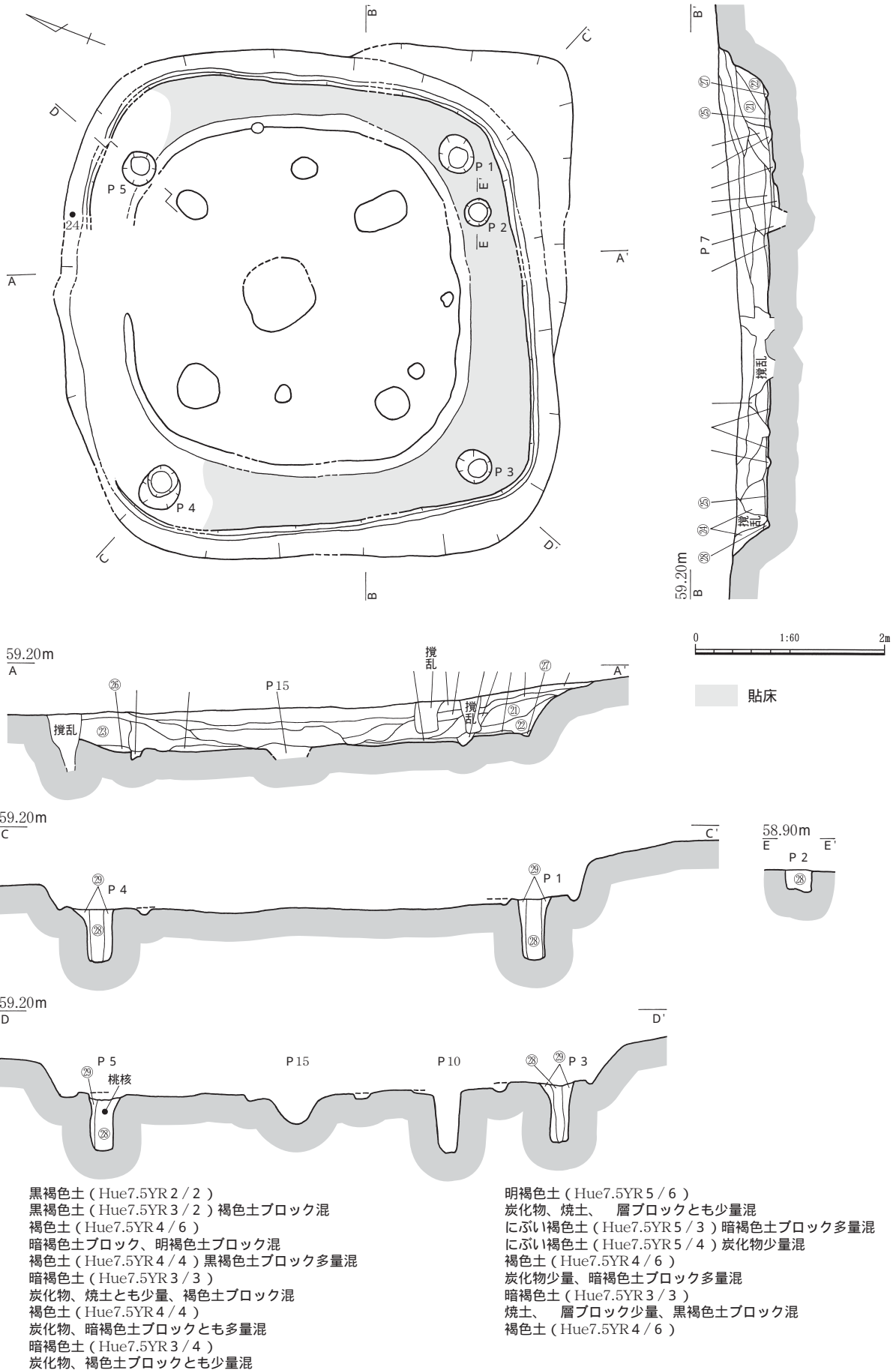
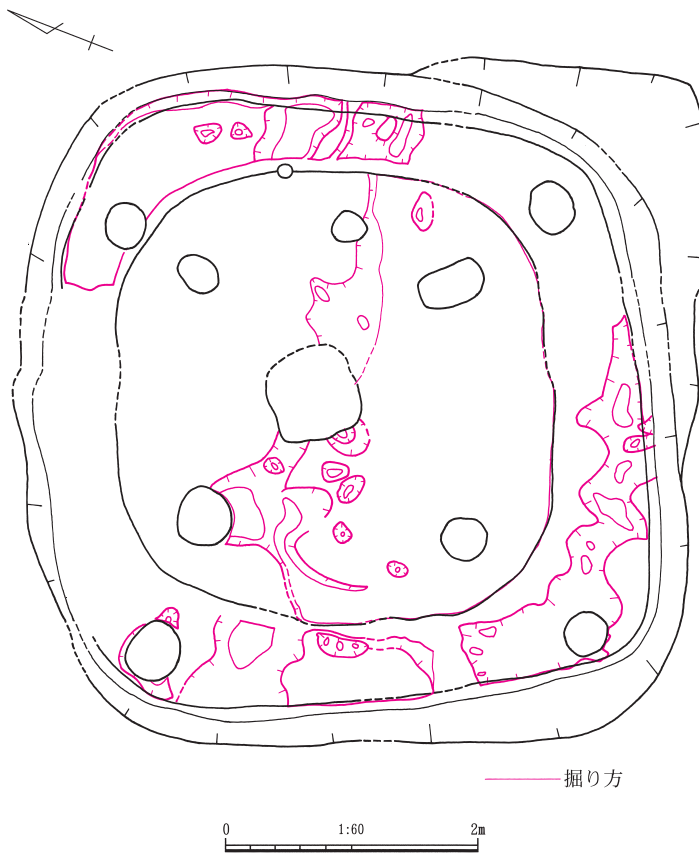
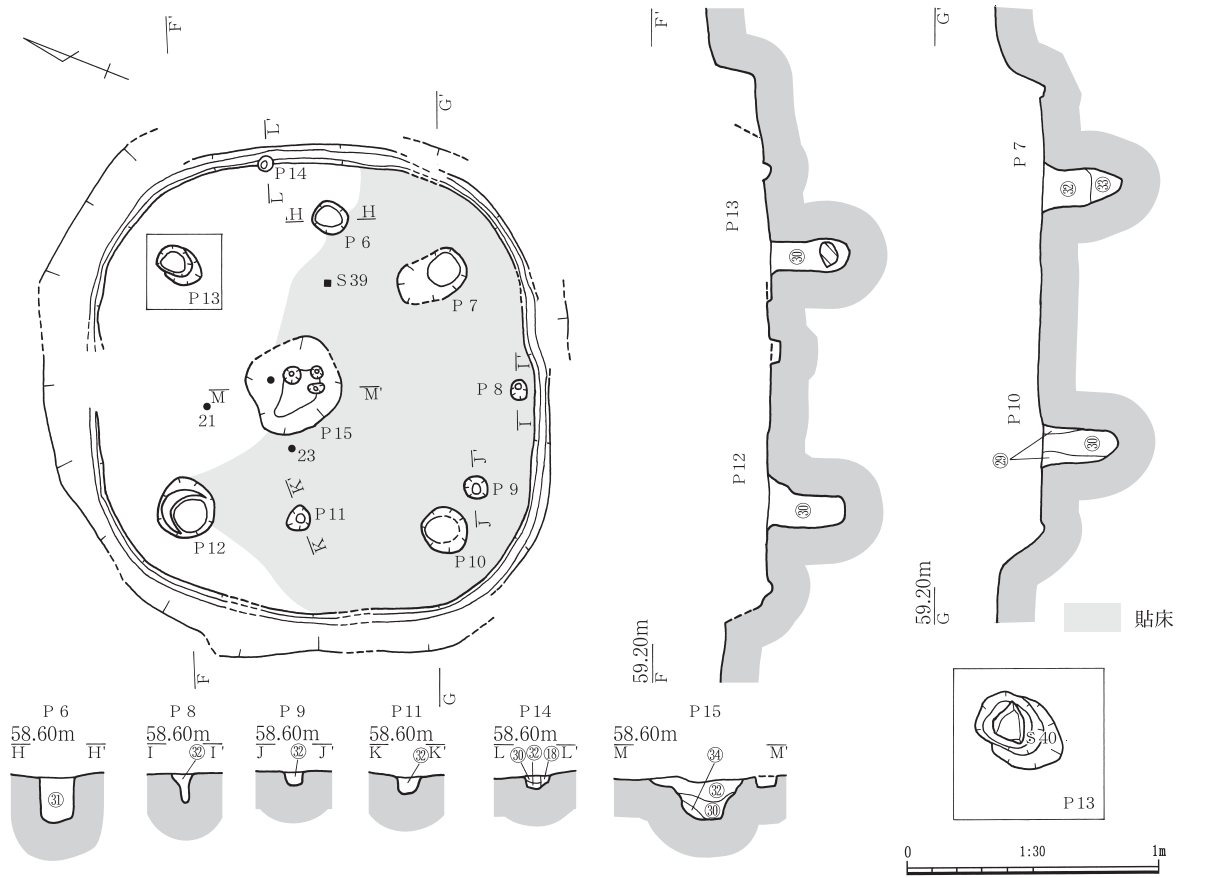


図18 竪穴住居 1 (1)



- ⑭ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6)
VI層ブロック多量、VII層ブロック少量混
- ⑮ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 4) 炭化物少量混
- ⑯ 暗褐色土 (Hue7.5YR 3 / 3)
焼土、VI層ブロック少量混
- ⑰ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6)
- ⑱ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
炭化物、明褐色土ブロックとも少量混
- ⑲ 明褐色土 (Hue7.5 YR 5 / 6) 炭化物少量混
- ⑳ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
炭化物少量、VII層ブロック多量混
- ㉑ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
黒褐色土ブロック、VI層ブロックとも少量混
- ㉒ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
- ㉓ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6)
炭化物少量、褐色土ブロック多量混
- ㉔ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 4) 炭化物少量混
- ㉕ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 6)
褐色土ブロック、VI層ブロック混
- ㉖ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 8) VI層ブロック多量混
- ㉗ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 4)
- ㉘ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
黒褐色土ブロック、炭化物少量混
- ㉙ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 8)
- ㉚ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 4)
炭化物、VI層ブロックとも少量混
- ㉛ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 6)
炭化物少量、VII層ブロック多量混
- ㉜ 黒褐色土 (Hue7.5Y 3 / 2)
炭化物多量、VI層ブロック、VII層ブロック混
- ㉝ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
炭化物、VI層ブロック、VII層ブロックとも少量混
- ㉞ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
炭化物、VI層ブロック多量混

図19 竪穴住居 1 (2)

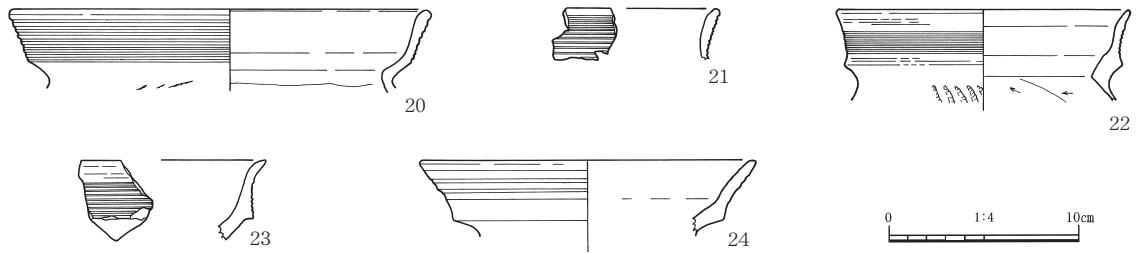


図20 竪穴住居1出土遺物

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
20	20	竪穴住居1 ⑭層直上	弥生	甕	*21.0	△4.3	外面：口縁部平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい黄橙色	
21	20	竪穴住居1	弥生	-	-	△2.7	外面：口縁部平行沈線文 内面：口縁部ナデ	砂粒少量 良	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	
22	20	竪穴住居1 ⑬層	弥生	甕	*15.6	△4.8	外面：口縁部平行沈線文後ナデ 頸部～肩部ナデ・刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	砂粒多量 良	橙色	
23	20	竪穴住居1	弥生	-	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ	細砂粒、礫少量 良	にぶい黄橙色	
24	20	竪穴住居1	弥生	甕?	*17.8	△4.0	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ	細砂粒少量 良	浅黄橙色	

遺物番号	挿図番号	地区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S39	-	竪穴住居1	敲石	角閃石安山岩	11.0	9.0	5.5	641.0	図版13-2
S40	19	竪穴住居1 P13埋土中	根石	角閃石黒雲母安山岩	20.0	12.3	8.6	1893.0	図版13-2

竪穴住居1 aの埋土は、明褐色土と褐色土に大別でき、前者は褐色土をブロック状に含むため、人為的に埋められた可能性がある。

出土した遺物は少なく、図化できたのは口縁部24のみである。24は住居の北辺壁際、いわゆる三角堆積層中で、床面からやや浮いた状態で出土した。竪穴住居1 aの時期は、資料に乏しいが口縁部24の年代観から、弥生時代終末期のものと考えられる。

竪穴住居1 bは調査当初、住居1 aとの新旧関係を誤認し、周壁の全体を検出し得なかった。おそらく平面形は不整な方形で、床面の規模は長軸4.1m、短軸3.7m、検出面からの深さ40cm、床面積は約12.3㎡である。住居1 bの掘り方は住居1 aの掘り方よりもわずかに深く穿たれていた。床面はほぼ平坦で、貼床は住居1 aと同様に南側のV層上に施されており、周壁下に1条の周壁溝(⑰・⑱層)を検出した。住居北辺は攪乱を受けており、周壁溝が全周していたかどうかは不明である。床面からピット6～15を検出した。ピット7・10・12・13は住居の四隅に位置し、近似した規模であることから支柱穴に相当する。ピット7・12・13は柱痕が遺存せず、柱材を抜き取ったものと考えられる。ピット13では面をもった扁平な石(S40)が出土した。根石と考えられる。ピット10の⑳層は柱痕に相当し、この幅から柱材の径は18cm前後であったと考えられる。ピット14は周壁溝の埋土を切っていた。ピット15は住居内のほぼ中央に位置し、いわゆる中央ピットに相当する。平面形は上端、下端共に不整形を呈し、底面には凹凸がある。埋土には炭が含まれるが、出土遺物は微量で機能等は不明である。

竪穴住居1 bの埋土は大きく明褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土に大別できる。黒褐色土①層は自然堆積である。中層以下の明褐色土、褐色土、暗褐色土は人為的に埋められた可能性がある。

遺物は少量で、図化できたのは4点である。口縁部21は床面直上で出土した。甕の口縁部22は⑬層から出土した。少量ながら出土した遺物の年代観から、竪穴住居1 bの時期は弥生時代終末期と考えられる。

られる。2基の住居は、時期を大きく隔てる遺物が出土していないため、時期幅はさほどないと考える。

(日置)

竪穴住居2 (図21・22 図版2-2・3、12-3、13-3・4、14-1・2)

調査地南東側の丘陵縁辺部緩斜面上に立地する。O・P3グリッドに位置し、I層下のV層上面で検出した。住居の東隣には近世以降に掘削されたとと思われる採土坑があり、住居東側の一部が攪乱を受けて流失している。平面形はいびつな隅丸形状を呈し、床面の規模は長軸3.4m、短軸2.8m、面積は約10.8㎡で、検出面からの深さは最大で68cmを測る。

床面には南西隅を除いて貼床が施される(⑥層)。また、被熱により硬化した焼土の広がりをも4箇所確認した。ピットは総数10基を検出した。住居内の四隅付近に位置するピット1～4は径約30cm、深さ60～70cmを測り、支柱穴と考える。ピット2には柱の痕跡を確認できるが、ピット1・3・4には柱痕が遺存しておらず、抜き取られたと考えられる。ピット5は、位置から中央ピットに該当すると思われる。断面形は下端が突出する形状を呈するが、突出部分(⑳層)は根による攪乱の可能性がある。ピット6～10は褐色系の埋土をもち、いずれも浅い。深さ3cm程度の細い溝がピット5を切って北方向にのび、ピット6・8が溝を切って重複する。竪穴部内を仕切る溝の可能性を考えている。周壁溝は東側、南側で攪乱のため途切れる箇所が認められるが、本来は全周していたものと思われる。ピット11は黄褐色土を埋土に持ち、周壁溝を切っている。貼床を除去すると底面には不整な凹凸がみられ、掘り方と考えている。

竪穴部埋土のうち、①層は自然堆積と思われるが、その下に堆積する②～⑤層には基盤土・焼土ブロックが混じり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

埋土中からは少量の土器片のほか、鉄製品片(F1)が床面から浮いた状態であるが出土しており、錆化が著しいが刀子の可能性もある。床面直上では土器(25、26)、台石等の石器類(S41～43)を検出した。S42には被熱痕跡が認められる。

床面直上で出土した土器の年代観から、本遺構は弥生時代終末期に属すると考える。

(加藤)

竪穴住居3 (図23～25 図版3、14-3・4、16)

P2・3グリッドにまたがり、竪穴住居2の南東隣に位置する。I層下のV層上面で検出した。竪穴住居2と同様、近世以降の掘削と思われる採土坑により住居の北東～東側を一部失っている。また、竹等樹木の細かい根が密に埋土中に入り込み、床面にも若干その影響が及んでいる。平面形はいびつな隅丸形状を呈し、検出面からの深さは最大で70cmを測る。床面の規模は長軸4.1m、短軸3.9m、面積は約16.8㎡である。

床面にはほぼ全面に貼床が施され(㉑・㉒・㉓層)、硬化した焼土の広がりをも4箇所確認した。住居内四隅に位置するピット1～4は支柱穴であろう。埋土は部分的に根攪乱を受けているが、いずれも柱痕が遺存せず、抜き取られたと考えられる。住居中央付近検出のピット5は中央ピットに該当しよう。埋土は炭を少量含むが、攪乱のためかしまりが悪い。周壁溝は東・南側で一部途切れるが、本来は全周していた可能性が高い。床面の北東辺では周壁溝の内側約0.1mに細い溝がほぼ並行して掘られる。規模は周壁溝に近似し、竪穴部の拡張の痕跡もしくは、住居内を仕切る床溝と考えている。その他床面上では、褐色系の埋土を持ち深さ15cm程度の浅いピット(ピット6～9)を検出している。

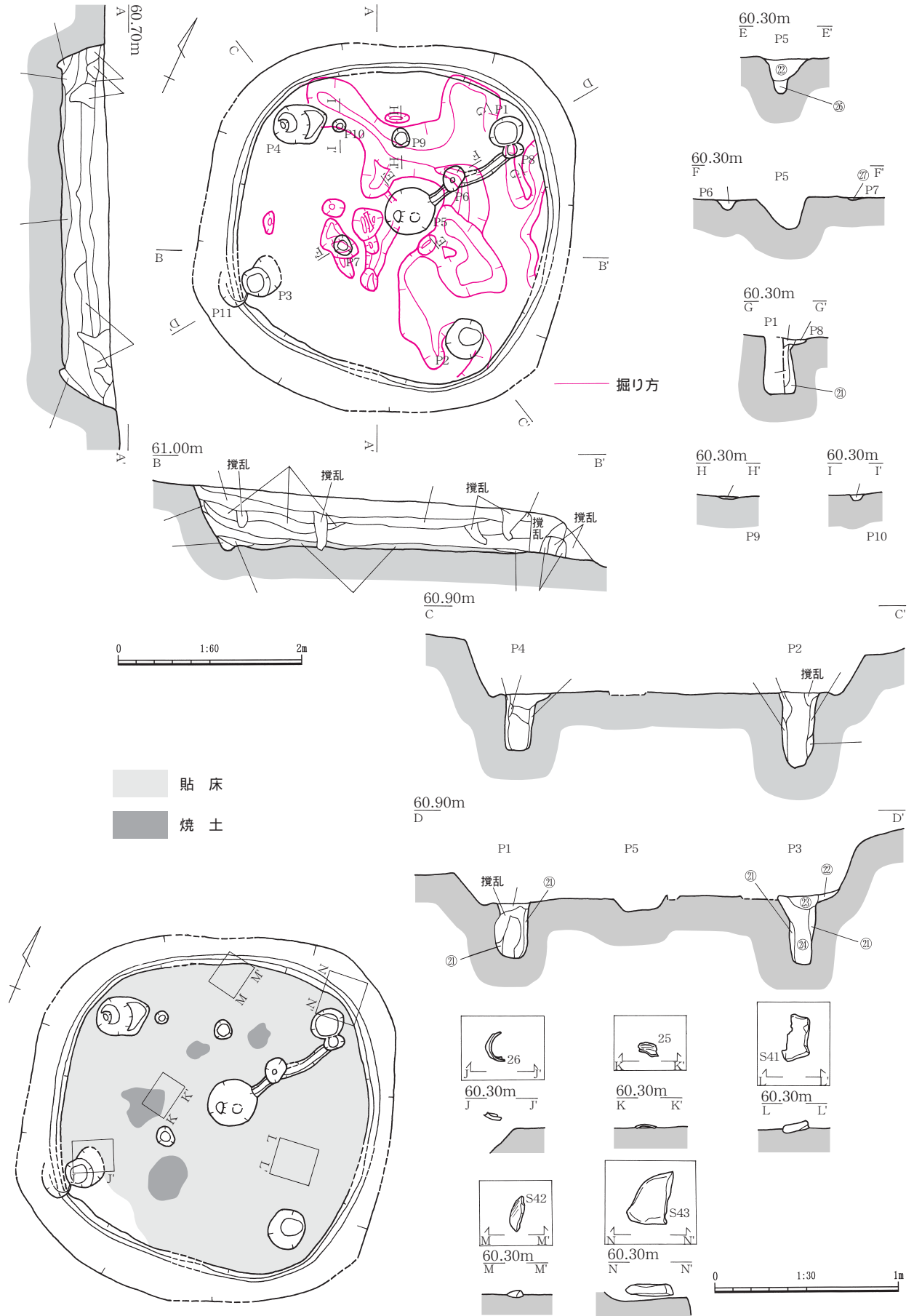


図21 竪穴住居2

竪穴住居2の土層堆積（図21）

番号	層名	色調	備考	番号	層名	色調	備考
①	黒褐色土	(Hue10YR 3/2)		⑮	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	VI層ブロック、炭少量混
②	褐色土	(Hue10YR 4/6)	VI層ブロック、炭少量混	⑯	黄褐色土	(Hue10YR 5/8)	粘性強
③	明黄褐色土	(Hue10YR 6/8)	VI層ブロック、炭少量混	⑰	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	炭少量混
④	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭、焼土少量混	⑱	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	炭少量混
⑤	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭、焼土少量混	⑲	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 6/4)	炭少量混、粘性強
⑥	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	炭、焼土少量混	⑳	黄褐色土	(Hue2.5Y 4/4)	炭少量混、粘性強
⑦	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/5)	VI層ブロック、炭少量混	㉑	橙色土	(Hue7.5YR 6/6)	炭少量混、粘性強
⑧	橙色土	(Hue7.5YR 7/6)	粘性強	㉒	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	VI層ブロック、炭少量混
⑨	黄褐色土	(Hue10YR 5/6)	VI層ブロック少量混	㉓	オリーブ褐色土	(Hue2.5Y 4/6)	炭少量混
⑩	灰黄褐色土	(Hue10YR 4/2)		㉔	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	VI層ブロック、炭少量混
⑪	黒褐色土	(Hue10YR 3/2)	炭混	㉕	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭少量混
⑫	黄褐色土	(Hue10YR 5/6)		㉖	にぶい褐色土	(Hue7.5YR 5/4)	粘性強
⑬	明黄褐色土	(Hue10YR 6/8)	③層と類似、色調やや暗	㉗	褐色土	(Hue10YR 4/4)	炭少量混
⑭	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	VI層ブロック少量混				

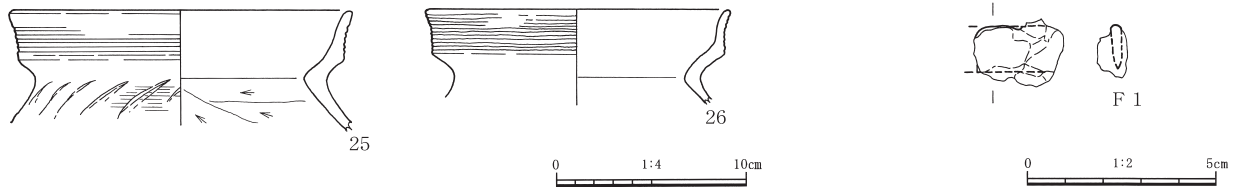


図22 竪穴住居2出土遺物

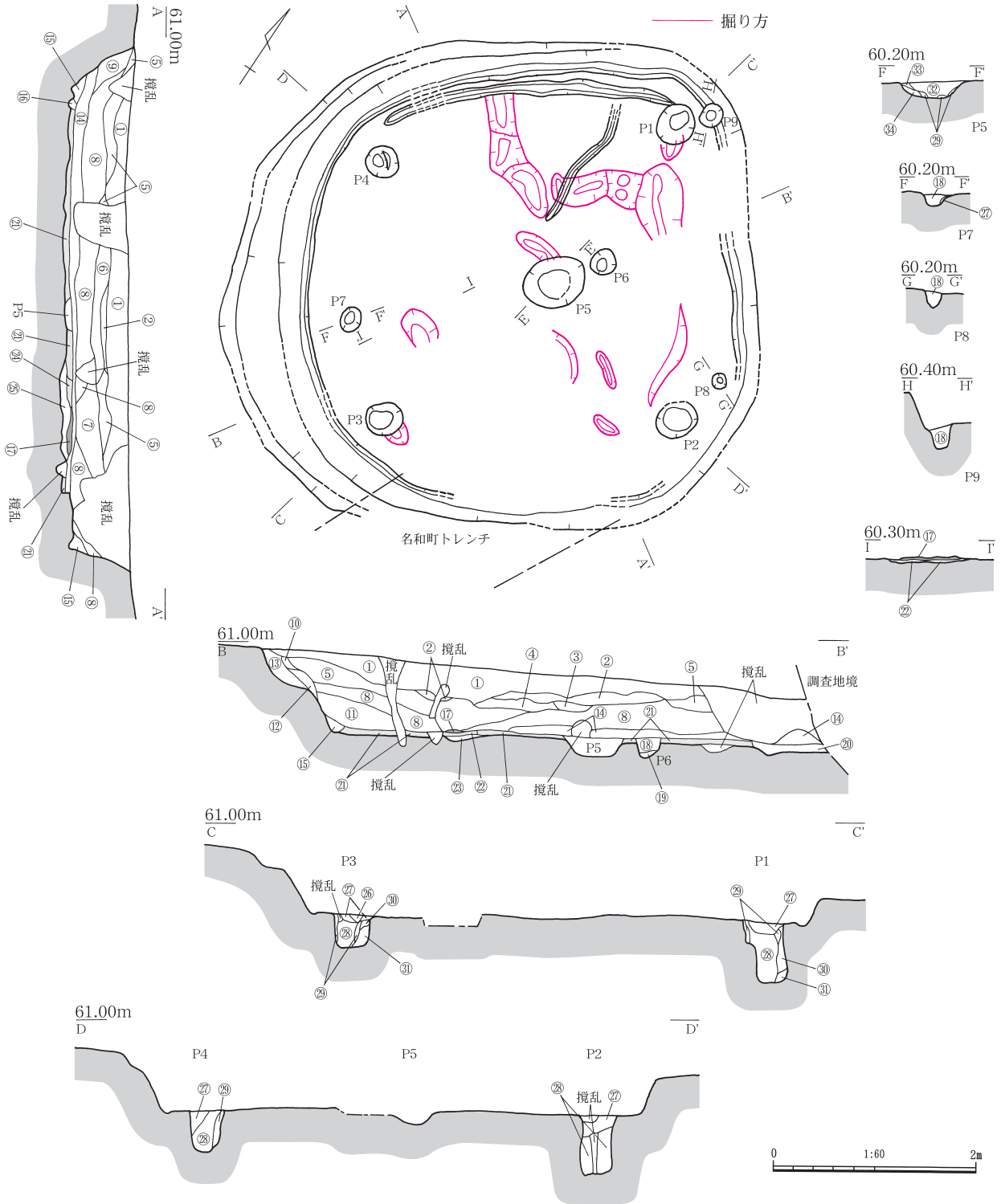
遺物番号	挿図番号	遺構位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
25	22	竪穴住居2 床直	弥生	甕	*18.4	△6.3	外面：口縁部平行沈線文後ナデ 頸部～肩部ハケ・ナデ・刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	砂粒多量 良	にぶい黄褐色	胎土分析試料7
26	22	竪穴住居2 床直	弥生	甕	*16.3	△5.0	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、肩部～肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	細砂粒・砂粒少量 良	浅黄褐色	胎土分析試料6

遺物番号	挿図番号	遺構位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	特徴
F 1	22	竪穴住居2 ④層	鉄製品（鍛造品）刀子？	2.4	1.6	0.8	4.3	2	錆化(△)	幅1.2cm強を測る薄板状の鉄製品破片。 錆膨れが進み下面から下手には酸化土砂が厚い。 刀子の刃部破片か。

遺物番号	挿図番号	地区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 41	21	竪穴住居2 床直	台石	角閃石安山岩	27.5	14.2	6.2	3595.0	図版13-4
S 42	21	竪穴住居2 床直	不明	角閃石安山岩	19.5	7.2	5.8	940.0	被熱痕跡有り、図版13-4
S 43	21	竪穴住居2 床直	台石	角閃石安山岩	32.2	22.5	11.0	10500.0	図版13-4

ピット9は周壁溝を切っている。貼床除去後、底面には若干の凹凸がみられ、掘り方と判断した。

住居の南西～北壁は二段に掘り込まれ、狭いテラス状となっている。竪穴部の埋土はテラス状部分を埋める⑬層を切って堆積していることから、竪穴掘削後テラス状の部分を程なく埋め戻し、周壁とした可能性がある。埋土下位の⑦・⑧層中では炭化材を検出した。これらの樹種同定を実施したところ（図24 樹種同定試料1～10）、スダジイ、クリ、ヤマグワ等の結果を得た。これらの樹種は、焼失住居内で出土した住居構造材の樹種同定において頻繁にみられるもので、当地域の他遺跡でも数多く報告されている（詳細については第4章2を参照）。ただ本遺構出土の炭化材は、出土位置が床面からやや浮いていること、一般的な焼失住居と比較して出土量が少なく、周壁等に被熱した痕跡がみられないことから、埋没時に混入した可能性が高いと考えている。竪穴部埋土の堆積状況は水平に近く、人為的に埋め戻されたものであろう。竪穴部埋土上位の②～⑤層は炭や焼土が混じり、④層は焼



- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①黒褐色土 (Hue10YR 2/3) 炭、焼土混 ②褐色土 (Hue10YR 4/6) 炭、焼土混 ③褐色土 (Hue10YR 4/6) ②より炭多量混 ④明褐色土 (Hue7.5YR 5/6) 炭、焼土多量混 ⑤にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) 炭、焼土少量混 ⑥褐色土 (Hue10YR 4/4) 炭、焼土ブロック混 ⑦オリーブ褐色土 (Hue2.5Y 4/6) 炭、焼土少量混 ⑧黄褐色土 (Hue2.5Y 5/4) 炭少量混 ⑨黄褐色土 (Hue10YR 5/8) 炭少量混 ⑩明黄褐色土 (Hue10YR 6/6) ⑪黄褐色土 (Hue10YR 5/6) 炭少量混 | <ul style="list-style-type: none"> ⑫明黄褐色土 (Hue10YR 6/6) VI層ブロック混 ⑬黄橙色土 (Hue7.5YR 7/8) V層類似、炭少量混 ⑭黄褐色土 (Hue2.5Y 5/3) 炭、焼土少量混 ⑮にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) 周壁溝埋土 ⑯にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) 炭少量混 周壁溝埋土 ⑰赤褐色土 (Hue 5YR 4/6) 焼土、被熱により硬化 ⑱にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) 炭少量混 ⑲にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/3) 炭少量混 ⑳明黄褐色土 (Hue10YR 5/4) VI層に類似 ㉑黄橙色土 (Hue7.5YR 7/8) 炭、焼土少量混、粘性強 貼床 ㉒明黄褐色土 (Hue10YR 7/6) 粘性強 貼床 |
|---|--|

図23 竪穴住居3 (1)

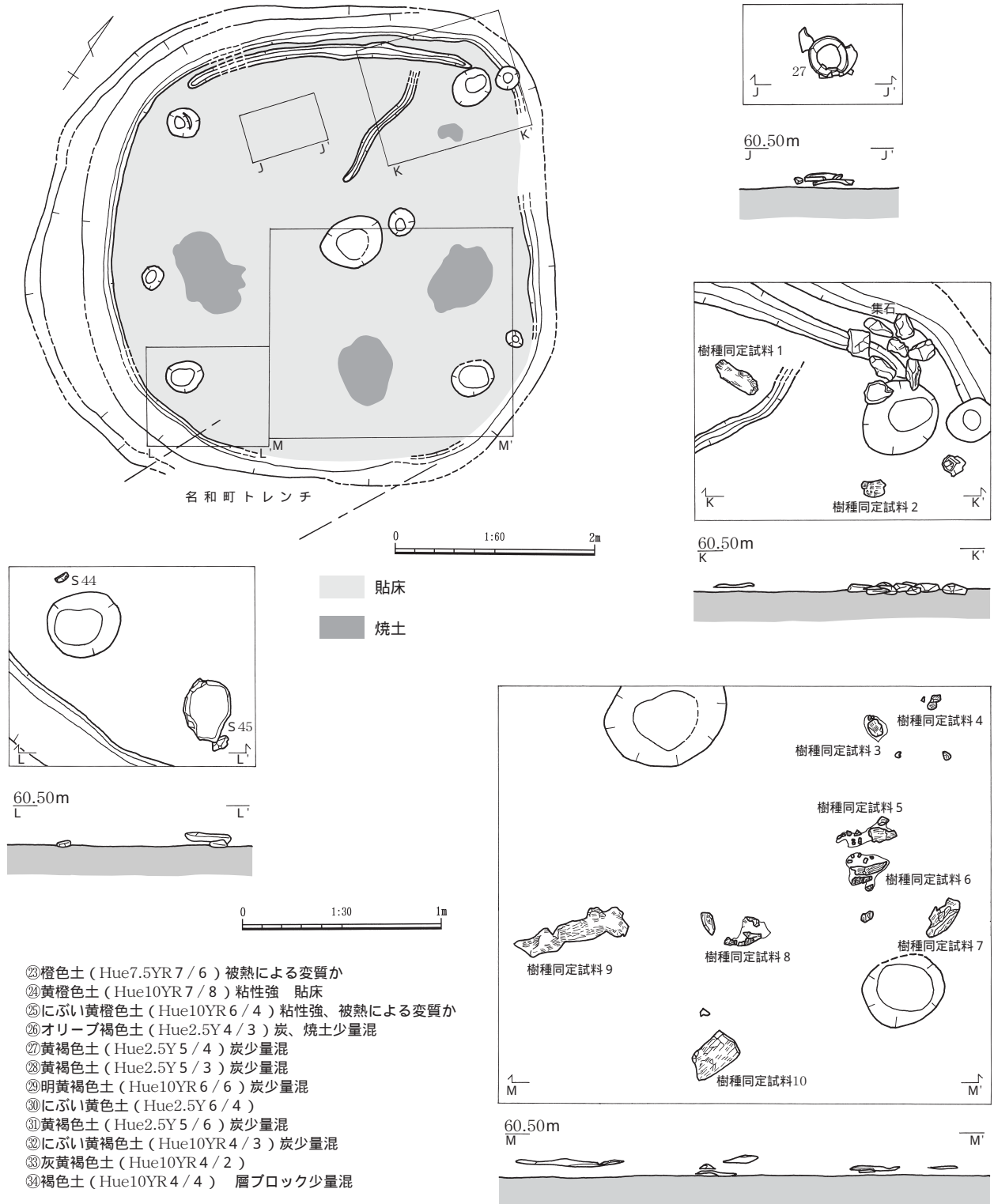


図24 竪穴住居3(2)

土ブロックを多量に包含する。自然堆積と考えられる①層が堆積する以前、本住居は廃絶後、廃棄土坑として使用されたと考えられる。

埋土上・中層からは土器片が出土しているが、床面直上出土分のみ図示した(27・28)。そのほか床面上では砥石(S44)、台石(S45)、竪穴部北東隅に集石を確認した(図24)。拳大の礫群で石材は角閃石黒雲母安山岩である。